

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00153

研究課題名（和文）室町障屏画試論 和歌と絵画の位相

研究課題名（英文）Reexamining Screen Paintings in Muromachi Period: Interaction of Waka with Images

研究代表者

井戸 美里（ID0, MISATO）

京都工芸繊維大学・未来デザイン・工学機構・准教授

研究者番号：90704510

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：かつて平安時代の寝殿造の空間を飾っていた屏風や障子・襖に描かれた絵は、多くの場合、和歌と密接な関わりをもっていた。本研究では、絵と言葉の双方により風景を描き出してきた「屏風歌」の伝統が室町時代の障屏画においても濃厚に受け継がれていた可能性について検証した。特に和歌や漢詩を詠み込んだことが推測される室町時代の花鳥画や山水画について現存作例と日記の記述など記録類の分析を行い、それらの絵画が描かれた屏風や障子・襖が置かれた室礼の場について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が目指したのは、屏風絵や障子絵の主題やモチーフを和歌や漢詩との関わりから分析することによって、儀礼や行事が行われた建築空間において絵画に内包される言葉がいかに空間を規定していたのか、ということ考察することであった。屏風や障子・襖は言うまでもなくかつては建築とともに存在した。現在では本来置かれた場からは切り離されて「作品」として所蔵されていることの多いこれらの屏風絵や障子絵について、同時代の文献資料の記述を参照しながら、可能な限り建築空間の室礼について解明した点に本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：The paintings on the folding screens and sliding doors that once adorned the Heian-period shinden-zukuri spaces were often closely associated with waka poems. This study examines the possibility that the tradition of "byobu-uta," which depicted landscapes through both pictures and words, was also strongly inherited in screen paintings of the Muromachi period. In particular, I analyzed the existing examples of Muromachi period bird-and-flower paintings and landscape paintings, in which waka poems and Chinese poems are assumed to have been composed, together with records such as diary entries, clarifying the places where the screens and sliding doors depicting these paintings were placed.

研究分野：日本美術史

キーワード：屏風 和歌 障屏画 室礼 名所 花鳥画

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、科研費補助金「やまと絵の場と機能をめぐる受容美学的研究」(若手研究(B)(2015-2018))および国際共同研究強化(2016-2018))の助成を受けて行った、大画面の「やまと絵」の遺品が多く残されている室町時代から国家的な歴史画を描く「日本画」に至るまで美術作品(特に屏風絵)について、その享受された場やその機能について考察を行うなかで浮上してきた「問い」に挑戦するために開始した。それは、そもそも日本の美術作品のもつ「かたち」に起因するものであり、西洋美術で中心的な考察対象となるような壁に固定された絵画(タブロー)とは異なる、障屏画の特徴である儀礼や行事の空間に根差した東アジア文化圏の「芸術」に通底する問題である。このことは西洋で生み出された美術史の学問をただ継承するのではなく、日本においては東アジアの土壤に合わせた作品解釈の方法を検討していく必要性を示しているとともに、「美術」や「絵画」ということばが移入された明治時代以前の文脈を明らかにしようという試みに他ならない。具体的に明らかにすべき問いとは、障屏画に描かれた絵画とそこに内包されたことば(和歌・漢詩・物語などのテキスト)はいかに呼応し合い、それぞれの受容空間に意味をもたらしただのか、ということである。

## 2. 研究の目的

屏風絵や障子・襖絵における多くの先行研究は、描いた画家やその技法を明らかにすることを主たる目的としている。しかしながら、上述のように、日本の絵画、特に屏風や襖は調度として建築空間と一体となる構造をもつため、空間やそこで行われる儀礼や行事の性質と密接に関わり、それゆえに作品の作者や技法という美術史的な視点からでは解決できない問題を多く抱えている。中国に起源をもち古くから描かれてきた障屏画のほとんどは、実景ではなく、詩歌に詠まれた主題やモチーフを描いているため文学の分野とも切り離せない。このような和歌と絵画を往還する風景の研究は、文学を中心に考察されてきてはいるものの、残された作品の不在から美術史では検証されることが少ない。そのため、現存作例が残る室町時代についても、絵画のなかに内在化する言葉を分析し、絵画と和歌の双方が紡ぎ出す風景について、建築や都市における空間的文脈において考察する研究はほとんど見られない。言葉と絵の双方のテキストを比較研究することによって、東アジア文化圏に特有の場に根差した視覚表象の可能性を追求することが本研究の目的であり、このような美術、文学、建築、都市という場が融合するなかで、障屏画を、それらが置かれた受容空間に焦点を当てた、学際的な研究を目指した。

## 3. 研究の方法

平安時代の王朝文学『栄花物語』(「御賀」の土御門邸の庭園の景)には、寝殿造の邸宅から見渡せる四季の花々を植えた庭園が見事に描写されている。先行研究でも指摘されるように、脚色があることは否定できないが、庭園が観賞されるばかりでなく、その庭園の風景が和歌に詠まれたり、屏風に描かれていた可能性が示唆されている。重要なことは、自然は縮景として庭園や絵画に取り込まれ、庭園も絵画も和歌の風景を喚起する装置となっていたことである。一方、屏風に描かれた風景を見て和歌を詠む行為は広く行われており、現存する屏風の風景を詠った夥しい量の「屏風歌」が現存していることから明らかである。この時代に遡る寝殿造の空間で使用された障屏画は東寺伝来の「山水屏風」を除いて現存していないが、本研究で注目したのは、室町時代になって広く制作された多くの障屏画のなかに、このような詩歌の伝統が強く意識されていた可能性である。これまでは、屏風歌の伝統は10世紀以降は下火になってとされ、鎌倉時代以降におけるこのような詩歌と絵画を明らかにする試みは十分になされていないのが現状である。そこで本研究では、平安時代の屏風歌に関する研究を屏風の置かれた場を交えて再考察するとともに、特に障屏画が現存する室町時代における絵画と詩歌の紡ぎ出す風景を分析し、それらがどのような場(儀礼や行事の場)を創出していたのかという点について考察を行った。以下、具体的な研究内容と方法の視点について述べる。

### 屏風歌の分析

前述のように、平安時代の寝殿造で使用されたことが確かな屏風絵の作例は残されていないが、膨大な数の屏風の風景を詠んだ和歌(屏風歌)の存在から、かつては和歌の世界と共鳴する障屏画が数多く存在していたことは明らかであり、その多くが自然の表象であることは和歌と共有される世界観を描く屏風絵にとって必然と言えるかもしれない。なかでも花・木・草・虫・水辺などが構成要素として重要であり、場合によっては、そのような自然物に着想を得てある特定の風景や名所が描かれることもあった。本研究では文学において先行研究の蓄積のある『古今和歌集』や『貫之集』などの平安期の歌集に収録される和歌に加え、南北朝期以降の頼阿の『草庵集』、室町期の貴人の歌集、禅僧による漢詩なども分析対象とした。そのうえで、寝殿造の建築で享受された屏風歌の伝統が、研究代表者がこれまで研究対象としてきた、やまと絵屏風の遺品が存在する十五世紀頃においてどのように展開していったのかを考察した。特に、鎌倉期以降においては、貴人や専門の歌人だけでなく、連歌師や禅僧による詩歌の分析も行った。

### 障屏画の主題・モチーフの分析

平安時代以来、やまと絵に描かれるのは「四季絵」「月次絵」「名所絵」「風俗図」など、四季における自然の風景や行事などの主題がほとんどであった(家永三郎『上代倭絵全史』1966年)。

の方法により屏風歌に詠われた風景を分析することで、ある程度、屏風に描かれた主題やモチーフの復元的な分析が可能となる。考察対象の屏風絵は、和歌や漢詩などの言葉の世界を内包していると考えられる四季の花鳥画や歌枕を描く名所絵である。具体的には、サントリー美術館蔵「四季花鳥図屏風」、メトロポリタン美術館蔵「花鳥図屏風」、ヴァージニア美術館蔵「花鳥図屏風」などのいわゆる花鳥画と、京都郊外や地方の歌枕(吉野・宇治・近江)を可視化した名所絵である。京都の郊外を高い視線から俯瞰的に描く「洛外図」についても、江戸初期に刊行された地誌や「名所記」に書き込まれた歌枕との関連性から検討を行った。

#### 同時代の文学作品や記録の分析 障屏画の空間

の言葉の分析と の図像学的な分析に加え重要なことは、同時代における記録や文学作品に描写される風景の検証である。『栄花物語』や『源氏物語』などの王朝文学には、寝殿造の空間における和歌や屏風絵、庭園についての記述が散見される。同時に当時の公家、武家、僧侶により記された日記類(室町期の伏見宮貞成による『看聞日記』や醍醐寺三宝院の満濟の『満濟准后日記』)には今は失われた障屏画の図様やそれらがどのような行事で使用されたのかを詳述されていることがある。このような空間は、同時代の史料を分析していくと、いわゆる「会所」や「書院」など、人々が集う寄合など、文芸が営まれた場であった可能性が高い。このような劇場空間とも呼ぶべき障屏画の構想を、室町時代の公家や将軍邸や、禅寺などから桃山時代の城郭における常設の壁画に至るまで、空間の意味とともに考察していった。

## 4. 研究成果

### 和歌・絵画・庭園の関係性について

詠われたモチーフを和歌と比較して分析を行うことで、屏風絵に写し取られたモチーフが、庭園に実際に植えられた植栽と多くが一致することから、庭園と絵画は和歌の風景を喚起するための装置となっていたと考えられる。『看聞日記』や『満濟准后日記』における庭園に運び込まれた名所の木々や花々について確認し、室町期においても庭園を目の前にして和歌が生み出されていた可能性を指摘した。こうした場において寄合の場が成立し、新たな詩歌が紡ぎ出されていたことが推測できる。平安時代の和歌と絵画が密接な関係を保持していた「屏風歌」の再来を予期させるものであり、障屏画は庭園と一体となり、和歌を喚起することが念頭に置かれた空間が構想されていたと考えている。

### 「洛中洛外図」の成立と名所和歌集について

和歌と関わりの深い絵画作品のうち、特に名所の風景という観点から考察を行ったため、名所を規定してきた名所歌集の収集と分析に加え、記録に見える名所歌集の編纂事業を整理し、さらに、17世紀の状況も視野に入れ初期名所記や地誌類と名所絵との関わりについて考察を進めた。特に、現存最古の「洛中洛外図」である歴博甲本の成立期において、連歌師による名所の考証や方角とともに記した「名所方角抄」の記述などが京都の都市の実態を把握する際に参照された可能性を指摘した。また、吉川史料館蔵「洛中洛外図屏風」も公開に合わせて実見し、そこに京都の地誌である『洛陽名所集』などの記述との関連性を指摘した。成果については『アジア遊学』に執筆した。

### 「吉野図屏風」について

サントリー美術館所蔵「吉野図屏風」のほか、同図様の17世紀の「吉野図屏風」の数点を比較検討し、そこに描かれるモチーフが16世紀頃からさかんに制作されてきた歌枕名寄などに収録される「吉野」を詠った和歌の記述によって想起される風景であることを指摘した。『義演准后日記』は「吉野図」がもとは御所に所蔵されていたことを記録しているが、古代の御幸があった吉野離宮との関わりからも、天皇家にとっては『万葉集』の頃から和歌として詠われた「川」の吉野が重要であったと考えられる。さらに、室町期に至っても、天皇の治世を寿ぐ和歌として名所歌合などで「川」の吉野のイメージが宮中で詠われていることから、歌枕としての吉野川を主要なモチーフとした「吉野図屏風」は平安時代の「屏風歌」の延長線上に捉えられる可能性について論じた。

### 「看聞日記」の建築空間における屏風絵・障子絵について

伏見宮貞成による『看聞日記』にみえる室礼に関する記事の分析を行った。特に、和歌や連歌会、七夕や法会などの行事が行われた「常御所」と「客殿」の空間の室礼を中心として、そこに置かれた花鳥や八景を描く障子絵には和歌や漢詩の風景が詠みこまれていること、さらにより仮設的な室礼として、文芸の場に相しい押板の飾りが出現していることを確認した。『看聞日記』が記された応永から永享年間、これまでも、押板の飾りが定着していく時期であると言われてきた。貞成が京都に移るまで長年過ごした伏見御所には、会所や泉殿など、さまざまな文芸を通じた交流のための独立した空間は備わっておらず、屏風を中心とする室礼によって、一時的な会所の空間が創出され、そこには本尊や唐絵を懸け具足を置くための場所が確保された。このような座敷の室礼は徐々に固定化していくのであるが、貞成の会所の室礼は、行事ごとに異なる飾りを施す仮設的な空間であり、その点にこそ室町時代中期の会所の本質がもっとも鮮やかに示されていることを指摘した。

### 京都画壇における近代の花鳥図案について

近代における花鳥図の展開について考察した。近代に入り書画の伝統、特に言葉から切り離された純粹な「絵画」として「花鳥画」が独立していくとともに、京都では海外の輸出向けの図案として「花鳥図案」が染織を中心とする実業家の支援のもとに制作されていく過程を論じた。中国起源の花鳥画は同時代の西洋的な技法としての「写実」的な描写を取り込みながら、日本においては「東洋」的な図案と解釈されていった。なかでも円山四条派の伝統を継承する京都の画家たちによる工芸品の下絵制作や幸野椋嶺や今尾景年などによる「花鳥図案集」の出版に焦点をあて、近代における京都画壇が殖産興業のなかで適切な図案を提供することが期待されていた可能性を指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井戸美里	4. 巻 235
2. 論文標題 『看聞日記』の居住環境と室礼 会所をめぐる交流を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藝能史研究	6. 最初と最後の頁 2-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井戸美里	4. 巻 246
2. 論文標題 歌枕の再編と回帰 「都」が描かれるとき	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 124-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 5件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 IDO Misato
2. 発表標題 Capital as Meisho: Embedded Material Sources in the Rakuchu Rakugai-zu
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies Conference（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 『看聞日記』のなかの室礼
3. 学会等名 第57回芸能誌研究会大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 想像の「東洋」 - 「海鶴蟠桃図」の系譜に関する図像学的研究
3. 学会等名 第二回国外所蔵韓国文化在 保存・復元 国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 再構想される洛外名所
3. 学会等名 建築学会都市史小委員会シンポジウム「旅の媒介装置」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 日本と朝鮮半島における南蘋様式の往還
3. 学会等名 美術史学会西支部大会「往還する東アジアの花鳥画」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 描かれた歌枕 『吉野図屏風』の源流を辿る
3. 学会等名 特別企画展「新春を迎えて 梅と桜の美術」特別講演（招待講演）
4. 発表年 2020年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 小野芳朗、岩本馨、岡田栄造、バルナ・ゲルゲイ・ペーター、水野大二郎、赤松加寿江、井戸美里、津田和俊	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 197
3. 書名 妄想 する未来 アート思考の挑戦	

1. 著者名 ハルオ・シラネ編、小峯和明、北條勝貴、宮崎順子、陸晚霞、錦仁、佐伯真一、安井真奈美、野田研一、李愛淑、堀川貴司、多田伊織、井戸美里、天野雅郎、宮崎法子、平松隆円、小山弓弦葉、堀口悟、崔京国、Nguyen Thi Lan Anhh、山田恭子、渡辺憲司、山本ゆかり、原田信男、伊藤信博、石塚修、劉曉峰、鍋田尚子、野村伸一ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 430
3. 書名 東アジアの自然観 東アジアの環境と風俗（東アジア文化講座4）	

1. 著者名 平芳幸浩、三木順子、井戸美里編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 384
3. 書名 芸術の価値創造 京都の近代からひらける世界	

1. 著者名 松岡心平編、井戸美里、原瑠璃彦、沖本幸子、内藤久義、黒沼歩未、金賢旭、高橋悠介、レ・レ・ウィン、竹内晶子、佐藤嘉惟、鶴澤瑞希、倉持長子、井上愛、中野顕正、玉村恭、横山太郎、ハナ・ミガーヒ、濱崎加奈子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 432
3. 書名 中世に架ける橋	

## 〔産業財産権〕

〔その他〕

韓国国外所在文化財財団のホームページにてオンライン国際シンポジウムでの報告内容を掲載  
<https://www.youtube.com/watch?v=CUmSdi5QwGw>  
ArtNewsに国際共同研究の成果が報道されました  
<https://www.artnews.com/art-news/news/haehakbandodo-dayton-seoul-sea-cranes-and-peaches-1234581955/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------